

## 14日 日曜

### マルコ

6:1 イエスはそこを去って郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。

6:2 安息日になって、イエスは会堂で教え始められた。それを聞いた多くの人々は驚いて言った。「この人は、こういうことをどこから得たのだろう。この人に与えられた知恵や、その手で行われるこのような力あるわざは、いったい何なのだろう。」

6:3 この人は大工ではないか。マリアの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄ではないか。その妹たちも、ここで私たちと一緒にいるではないか。」こうして彼らはイエスにつまずいた。

6:4 イエスは彼らに言われた。「預言者が敬われないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」

6:5 それで、何人かの病人に手を置いて癒やされたほかに、そこでは、何も力あるわざを行うことができなかった。

6:6 イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を巡って教えられた。

6:7 また、十二人を呼び、二人ずつ遣わし始めて、彼らに汚れた霊を制する権威をお授けになった。

6:8 そして、旅のためには、杖一本のほか何も持たないように、パンも、袋も、胴巻の小銭も持って行かないように、

6:9 履き物ははくように、しかし、下着は二枚着ないようにと命じられた。

6:10 また、彼らに言われた。「どこでも一軒の家に入ったら、その土地から出て行くまでは、その家にとどまりなさい。」



6:11 あなたがたを受け入れず、あなたがたの言うことを聞かない場所があったなら、そこから出て行くときに、彼らに対する証言として、足の裏のちりを払い落としなさい。」

6:12 こうして十二人は出て行って、人々が悔い改めるように宣べ伝え、

6:13 多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒やした。

マルコによる福音書はローマ人的な人々を対象に書かれたと理解できます。すなわち功利主義的ともいえるような、現実主義的な人々です。ここではイエス様は”力に満ちた御父のしもべ”という面が強調されています。確かに5,6節ではイエス様がすばらしい御力によって次々に、奇跡のわざを行う様子が記されています。

私たちもイエス様のみわざを期待して祈り求めますが、ここから大切なことを学ぶことができます。第一にはイエス様でさえ御父のご計画を成し遂げるしもべであって、そこには優先順位があるということです。人々にご自分のメシアであることを知らしめるために、他の人（長血をわずらった女性）も癒す必要があったのです。

ですから第二には、私たちは自分のことが後回しになったとしても、「恐れなくて、ただ信じて（5章）」待つべきであるということです。

また郷里の人々が不信仰であったので、「何も力あるわざを行うことができなかった。」とあります。

第三には、人が信じないのなら、一人の人に固執することなく、別の人を招くことを優先なさるといことです。または機が熟すまで待たれるということです。

主のみわざを願うときには、よく主のみこころを知って理解するようにしましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

